

自己評価報告書(最終報告)

報告者

社会系コース／齋木 哲郎

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

まず始めに断って置きたい。二月の社会系コースでコース長の人選を行った際、齋木は他大学へ転出する。他の教授も役職に就いたり停年を迎えるため、立岡教授以外該当者なし、との判断で、立岡コース長の再選が決まった経緯がある。しかし、現段階で私の割愛については知らされていない。企画係りに尋ねたところ、全員提出とのこと。そこで四月以後私が本学に留められた場合を仮定して、回答する。

私はこれまで学士院賞の受賞通知を本学の不正で受け取ることができなかった。けれども、学士院賞を受賞通知が幾度と私に向けて発せられたのは確かである。その私がなお科研に応募し、若い研究者を押しつけて研究費を獲得しようとするのは、学会推薦の立場から言っても好ましいことではない。科研費の申請については慎重を期したい。ただし、出版助成金の申請は別に考えなければならない。

2. 点検・評価

今年度に入って、齋木は割愛を断ったとの虚偽を捏造して、私に対する割愛の申し込みを断ることが繰り返された。そうした中で私はどう対応したらよいのか、分からない。今年度も、私が日本学士院賞の受賞を受けるか否かの問い合わせが、本学にもたらされたが、それを田中雄三学長は、私のセクハラ事件を捏造し、それを理由に私の受賞を拒絶したという。大学という最高学府でこれほどの犯罪がなされたことは、我が国でこれまで例をみないことであろう。出来るだけ早く、司直による犯罪者達の逮捕と起訴が望まれるところである。

科研の申請は、現在学会推薦で日本学士院賞の候補に登っている私には、若い研究者の研究の機会を奪うことであり、躊躇われることである。犯罪者が逮捕され、その後日本学士院賞の受賞がきまれば、その時に考えたい。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

学会等を通じて、他大学の学生さん達へ本学の受験を勧めて貰うというのが、これまでの方策であった。今年もそのように活動したい。

2. 点検・評価

例年通り、学会開催時に、本学の院生が不足していることを他大学の教員に告げ、希望者がいれば学生に受験を勧めてくれるよう、依頼しているところである。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

例年とさほど変わらない。学生からの質問や相談には親身になって対応する。私が特に学生達に求めてきたのは、早く教員採用試験に対して準備をし、合格を期せ、ということであった。そのためには、クラブ活動よりも受験対策を優先し、本学で開催されている様々な講座には積極的に参加するよう促すことを要するであろう。本年もこの点を重視して指導したい。

2. 点検・評価

学部学生に対し、本学が行っている就職支援活動に積極的に参加することが教員になる積極的な手段であることを、授業や談話を通じて話している。

大学院の授業「哲学倫理学研究」には、中国からの留学生が受講する例が多い。今年度は授業の合間合間に中国語によるまとめを入れ、留学生達の理解に資そうとした。それを喜んだ留学生もいたが、逆に私は先生の日本語が分かる、中国語は入らない、と申し出た留学生もいた。もう少し様子を見たい。

II-2. 研究

1. 目標・計画

後漢期における儒教の展開を研究する。部分的には一昨年からはじめた研究ではあるが、昨年までに春秋学に関する論文が3篇、民間儒教に関する論文を1篇(いずれも未公開)を書き上げている。本年度はそれを基にして更に後漢と魏の時代に跨る荀悦の史学と儒学、また後漢期における春秋左氏学に関する論考をものしたいと考える。

また、昨年度は私に対する割愛がいつのまにか潰されていたりして、年間の確実な予定が建てられなかった。そのため、海外からの招聘は断らざるを得なかった。今年度もまた犯罪まがいの妨害工作が行われるかも知れないが、海外からの招聘には積極的に応じてゆきたい。

2. 点検・評価

今年度書き上げた研究成果は以下の通りである。①「荀悦の『漢紀』と『申鑑』について—史評から鑑戒へ—」(1頁1600字×19頁)②「後漢末、皇帝と宦官達の老子信仰」(1頁1600×12頁)③「桓譚『新論』の春秋学」(1頁1600字×8頁)④「(翻訳)鄭玄の『発墨守』『箴膏肓』『起廢疾』(1600字×42頁)。④は、後漢の大儒鄭玄と何休との間で交わされた『春秋』3伝の優劣をめぐる論争である。今日にはその一部が伝わるだけで、議論が特殊であったことから、読まれる機会が少ない。この訳稿が公になれば学界を裨益すること桃井と思われる。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

与えられた職責は忠実に果たしたい。
私に向けられた犯罪対策の一環としてでもあるが、これまでのように学内執行部によって行われたがごとき犯罪は司直の手も借りて極力糾弾し、大学の犯罪化を防ぎたい。そのためには、学内でこれまでどの様な犯罪がなされてきたかを公表する必要があると考え。

2. 点検・評価

大学の犯罪化を防ぐためにやれるだけのことをやっている。とはいえ、私がどういった犯罪を受けたか、その内容を如実に司直に伝えることがそのほかかどであるが。
また、昨年の職員宿舎の管理委員会で「震災に備えて宿舎に屋上を設け、津波からの避難所として利用すべき」事を提言した。屋上が出来て、それが避難所として地域の皆さんにも開放されれば、百人、もしくは千人単位で人々の命をすくうことになる。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

附属で行われる学生の教育実習に対しては極力参加して指導に当たりたい。
学会役員として課せられている職務は誠実に果たし、学会の発展や文化の向上に力を尽くしたい。
研究の項とも重なるが、近年、海外からの招聘依頼が多くなっている。置かれている状況の悪化を克服して、極力参加したいと考えている。

2. 点検・評価

日本道教学会、中国出土資料学会の理事として課されている役割(運営上の問題や学会誌の発刊)をこなした。日本中国学会の大会で司会を務めたのは中間報告の通りである。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)